

原會長が會見についての報告の概要は斯ふであつた。

爭議に對しての誠首者は四十名より出さない、そして退職金は特に規定通り出す云ふ事であつた。その報告に満足して下山を希望するものが、高野線支部、第九支部であり、其他の各支部は頑として應じなかつたのであつた。

斯る不利な條件に屈伏出来ない、と叫ぶ聲各所に昂り、會長は陣頭に立て、普賢院に於て、全大會を開き、榎原會長の詳細なる経過報告あり、爭議團の態度を鮮明する處あつて、團員の意志表示を求めたるに、匍まで戦ふの事に、衆議一致を見たのであつた。

然るに一方に於ける高野線及第九支部は之に追従出来難き事情が生じ、會長は之を見るに忍びず、會長より告別の挨拶を述べ彼等は下山したのであつた。

斯くて益々爭議團の統制が悪化し形勢逆轉の傾向を見るに憤怒極に達した、此時を見て三つて會長榎原氏の肚裏は屹度苦戦であつたに相違ない、思出多き普賢院の大會を終へて下山の餘儀なくせしめた事が、終世之を記念すべきだ、我等の一週間に亘る持久戦も利あらずして下山するも決死的を以て戦ひ勝利者として再び相見んことを念じつゝ、下る同志三百五十餘名が、同志會旗を先頭に警官隊の物凄く警戒の裡に高野山を去つた。

我々を調和する勞働歌は聲高く、山に谷に、銜を送つて行く感慨無慮だ。高野下驛四時四十八分發車三輛連結電車に便乗して悲想なる思いをして大阪にて陣營を張るべく歸坂の途についた、車中警戒の爲乗込だ大阪府特高課、堺、島の内署の正私服巡査の監視嚴重を極めさうく長野驛に着するや警官と衝突を生じ藤林君外十四名が檢束され、堺東驛にて亦もや東君外十三名が住吉東、天下茶屋等にて二十餘名檢束されたので首腦者のなくなつた爭議團はついに手も足も出ず、難波驛に着きし時には團員僅かに貳十名足らずの有様であり、此の内に於ても正服用のもの十一名は檢束され我々が下山後先づ粉溜の本部に勢揃して陣容を立て直し、いよく最後の戦闘を決行しようとした事は、警察側の峻烈なる干渉の爲に水泡に歸し最後に五十二名の犠牲者を出せしみにて何等得る所なく爭議は遂に犠牲者のみに依つて戦つた。

爭議の原因と私の任務

筆 義 禮

一九二七年七月十三日午後四時半に南海當局の不當なる彈壓に止むを得なく遂に關西の天地に爆發は起つた。それは云ふまでもない南海同志會のストライキである。吾等同志二千幾百名が三千尺の高峰高野山上に立籠り一週間に渡つて戦つた原因は何處にあるか、それは南海當局にあるのである。その責任を吾等従業員に轉化せんが